第十九回ふくふく童話大賞「大賞」

クモッチの巣

公園のベンチで、ケンちゃんは涙をふきました。学校でまた、オサムくんに意地悪されたのです。

家に帰る前には笑顔にならなきゃ、と空を見上げると、頭上にクモの巣がありました。

ケンちゃんはクモが嫌いです。姿かたちもグロテスクだし、網に引っかかって食べられる昆虫が、かわいそうに思えるのです。

クモの巣があるのはイヤだけど、風が吹いてとても気持ちのいい場所でした。

ひらひらと舞い落ちてきた木の葉が一枚、クモの巣の網に引っかかりました。すると、どこかに隠れていた小さなクモが葉っぱに近づき、そのまわりの網の糸を切り始めました。そして葉っぱは、きれいにポロリと落ちたのです。

ケンちゃんはびっくりすると同時に、不思議でした。

「どうして、今のが虫じゃないって、わかったんだろう」

目はクモの巣に釘付け、もう泣いていたことも、クモが嫌いだったことも忘れていました。

「網に穴があいちゃったんだけど」

心配して見ていると、クモはお尻から糸を出して、せっせと網の

修理を始めました。その姿はケンちゃんの心を捉えました。頭の中に設計図があるのでしょうか。行ったり来たりするうち、穴は跡形もなくきれいに塞がってしまったのです。

「クモッチ、すごーい！」

いつのまにかケンちゃんは、クモッチという名前までつけていました。もう他人とは思えません。

クモッチのすご技をもう一度見たくて、ケンちゃんは足もとに生えている草の葉っぱをちぎり、網に向かってエイッと投げました。葉っぱは少し風に流されましたが、なんとか網に引っかかりました。

「さあ、クモッチ、また見せて」

ケンちゃんの応援を知ってか知らずか、クモッチは同じように葉っぱを落とし、穴を繕います。それはもう熟練の職人、匠の技です。

再び同じことをすると、「またかよ」という態度のクモッチでしたが、辛抱強く同じことを繰り返しました。仕掛けが壊れたままでは獲物をとれません。面倒でも修理しなければならないのです。

ケンちゃんは、健気なクモッチを見てかわいそうになりました。小さな体のクモッチにとって、けっこうな重労働であることは間違いありません。ちょっと反省です。

そのとき、一匹の虫が網にかかりました。本物の餌です。これまでのケンちゃんだったら、「早く逃げて」と思ったはず。でも今は心が

揺れています。それどころか、クモッチを応援したい気持ちが強くなりました。クモッチも、食べなければ生きていけないのです。

バタバタと暴れる虫。このまま暴れ続けたら、網が外れて逃げていくかもしれません。

さあ、どうするクモッチ。ケンちゃんは気が気ではありません。するとクモッチは、虫の回りを歩き回って、お尻の糸で包みこみました。ネバネバする糸に絡まれて、虫はしだいに身動きがとれなくなりました。

それでもすぐには手をつけません。格闘する無駄なエネルギーを使わず、自然に衰弱していくのを待つ作戦です。

「頭いいなあ」

虫と葉っぱを区別できるのも、これで納得しました。バタバタと暴れないなら葉っぱだとわかるのです。捕り物の仕掛け、破れた網の修理、獲物かどうかの判別…。小さなクモッチに、たくさんの知恵が備わっていることに、ケンちゃんは感動しました。

次の日も、公園に寄りました。その日も同じ場所に、クモッチは陣取っています。

そよそよと気持ちのいい風の中、ケンちゃんは草の葉を投げました。悪いとは思ったけれど、やっぱり匠の技を見たかったのです。

その時、後ろで声がしました。

「おい、何してるんだよ」
びっくりして振り返ると、オサムくんが立っています。うろたえたケンちゃんは、うっかりクモの巣のほうに目を向けてしまいました。ちょうどクモッチが、葉っぱの周りを切り抜いているところでした。
「へえ、おもしれえ」
一部始終を見終えたオサムくんは、自分も木の葉を投げ入れました。
それぱかりではありません。面白がったオサムくんは、やっと繕い終えた網に、今度は小石を投げ入れたのです。小石は網を破って向こう側に飛んでいきました。さらに小枝を投げました。こうなったらもう、網は持ちません。ダラリと垂れ下がったボロボロの網から、ク

モッチも姿を消していました。

「何するんだよっ！」

堪忍袋の緒が切れたケンちゃん。信じられないことに、自分より大きなオサムくんに飛びかかったのです。

「謝れっ！　クモッチに謝れっ！」

今までのケンちゃんではあり得ない剣幕に、オサムくんは目を丸くしました。

「チッ、なんだよ、たかがクモじゃないか」

舌打ちして、ケンちゃんを振り払いました。そして足早に去っていったのです。

もしかしてクモッチ、死んじゃった？

「ごめんね、ごめんね、クモッチ」

一人残ったケンちゃんは、いつまでも泣いていました。

翌日は、ケンちゃんの心のように、雨。帰り道に公園に寄ることもありませんでした。いえ、寄る気にさえもなれなかったのです。

お母さんは、昨日も今日も食欲のないケンちゃんが心配でした。何か話してくれるのを待っていましたが、ケンちゃんからは話はありません。

「ケンちゃん、何かあったんじゃない？」

「なんでもない」

ケンちゃんは小さな声で答えます。学校でいじめられても、お母さんに話したことはありません。そして無理に笑顔をつくっていました。心配かけちゃいけない、って思うからです。昨日オサムくんに振り払われて倒れ、膝と掌を擦りむいたのも、転んだと言ってごまかしたのでした。

でもお母さんは、うすうす気付いていました。昨日、目が真っ赤だったから。

「ケンちゃん、お母さんに心配かけないようにしてるんでしょ。でも言ってくれない方が、ほんとはお母さん、悲しいの」

「え、そうなの？」

ちょっと意外に思ったケンちゃんに、お母さんは続けます。

「おととい、クモッチの話をしてくれたとき、とっても嬉しそうだった。でも昨日は違った。お母さんでは、ケンちゃんの力になれないのかしら」

お母さんに嘘をつくことはできないな、とケンちゃんは思いました。それに隠しておくことがお母さんを悲しませることになるなんて、知らなかったのです。

クモの巣が壊されてしまったことを話したら、オサムくんは学校でも嫌われていることを、話さなければならなくなりました。

「みんなで遊んでいるのを邪魔したり、花壇のお花を折ったりするんだ」

「そう。でもほんとうはオサムくん、淋しいのかもしれないわよ」

お母さんは、また意外なことを言いました。

「きっと、お友だちが誰もいないのよ」

「仕方ないよ。みんなに乱暴するんだもん」

「ケンちゃんは、オサムくんのこと、どれくらい知ってる？」

今日のお母さんは、ケンちゃんが考えていないことばかり言います。「ケンちゃん、クモって嫌いだったでしょ？でもクモッチのこと知っていったら、大好きになったじゃない？」

嫌いだからと心を閉ざすのではなく、まずお話ししてみようよ、知ってみようよと、お母さんは言います。

「誰かに何か言ってほしくて、わざと嫌がることをしてるのかも。もしかしたら、優しくお話ししてくれるお母さんだって、いないのかも知れないわよ」

「でも、オサムくんとお話しするなんて絶対無理。クモッチにあんなひどいことしたんだもん」

ケンちゃんは、強く首を振りました。

次の日も雨でしたが、授業が終わる頃には雨が上がり、空が明る

くなってきました。
帰り道、ケンちゃんは恐るおそる公園の木の下に。するとまた同じ場所に、巣がかかっているではありませんか。
「あっ、クモッチ、生きてたんだ！」
ケンちゃんの顔は、パッと明るくなりました。よかった、よかった。
でも、こちらに向かって走ってくるのがオサムくんだと知ったとたん、真っ青になりました。どうしよう、また壊されるんじゃ…ケンちゃんは、拳をかたく握りしめます。
息を切らしたオサムくんは、体に似合わない小さな声で、モゾモゾと言いました。

「あの…、こないだは、ごめん」

なんとオサムくんは、謝りに来てくれたのです。ケンちゃんの緊張はふわりと解けました。そしてお母さんの言ったように、お話ししてみようかな、と思いました。

「うん。でも、もう意地悪しないでね」

オサムくんは照れくさそうに、だけど嬉しそうに、コックリとうなずきました。

クモッチの巣は小さな水滴をたくさんつけて、キラキラと輝いています。

（南ふう）

『お母さんの家事放棄宣言』

お母さんが突然「家事放棄宣言」をしました。昨日の夜のことです。

僕はいつものようにテレビの前でスーパーマリオのゲームをしていました。お姉ちゃんは髪の毛をふきながらお風呂から出てきたところで、お兄ちゃんはバイトから帰ったばかりで、冷蔵庫からコーラを出してグラスに注いでいました。

お母さんが、そう、突然

「みんなに話があるの」と言いました。

僕はゲームを続けたまま、お姉ちゃんはバスタオルを頭に巻きなが

ら、お兄ちゃんはグラスに入れたコーラを飲みながら聞いていました。

「お母さんは明日から全ての家事を放棄します。だからみんな自分のことは自分ですること、家の掃除や洗濯は三人で分担してそれぞれができることをするように、よく相談して決めるのね。食事はお姉ちゃんが作るといいと思うけど、悟もゲームばかりしていないで手伝うのよ。朝ご飯も自分たちで考えて食べてね。お母さんは明日から自分の好きなことをします。とりあえず明日は朝七時出発で山原へドライブに行きます。みんなは寝坊しないようにちゃんと起きて、学校へ行くのよ。わかったわね」

僕らはびっくりして、僕はマリオを穴に落としてしまい、お姉ちゃ

んはバスタオルのターバンを落としてしまい、お兄ちゃんはコーラでむせてしまいました。

「家事放棄ってなんだよ」

「お母さん、何言っているの」

「お母さん、どうしたの」

兄弟三人が同時に叫びました。

「だ・か・ら、お母さんは明日から自分の好きなことだけをすることに決めたの。今まで家のことばかりで、自分のやりたいこともできなかったから、これからは自分のために生きることに決めたのよ」

「やりたいことって何をするんだよ」お兄ちゃんが言いました。

「それを、明日、山へ行って考えるのよ」
「別に山へ行かなくてもいいじゃないか、家のことをしながら好きなことをすればいいだろう」
「お母さんは自分の好きなことだけをしたくなったの」
と「好きなことだけ」の、だ・け・を特に強く言いました。
自分の好きなことだけをしたいなんて、大人はいいなーと僕は心の中で思いました。
「そんなのわがままよ。私たちはまだ子供なんだから親がめんどうをみるのはあたりまえでしょう。それって育児放棄じゃないの」
お姉ちゃんが言いました。

「家事を放棄するだけで、育児放棄はしません。あなたたちのことはしっかり監視はします」

「そんなこと急に言われても、今までやったことがないんだから、できるわけないだろう」

お兄ちゃんがふてくされて言いました。

「急にでも、徐々にでもすることは同じです。掃除は掃除機をかければいいことだし、洗濯機だって悟のプレステより簡単よ。サルよりちょっと賢ければ使えます」

「お父さんはどうするんだよ」

「だいじょうぶ、お父さんには納得してもらっています。びっくりし

ていたけど、よく話してわかってもらいました。あなたたち三人が何を言ってもお母さんの決心は変わりません」
と一方的な家事放棄宣言をしてお母さんは寝てしまいました。
僕ら三人はリビングのテレビの前で
「何、いまの？」って感じで顔を見合わせました。
「悟、お前、お母さんを怒らせるようなことをしたんじゃないか。宿題を忘れたとか、テストで０点とったとか」
「そんなことないよ。この前のテストも初めて九十点取って褒められたんだから」
「加奈はなにか思い当たることはないのか」

「お兄ちゃんこそ毎日帰りが遅いじゃない」
「俺はバイトだからしょうがないじゃないか」
「本当に明日からお母さん何もしてくれないのかなぁ」
「きっと俺たちを脅かしているだけだよ、明日の朝になったらいつも通りになっているよ。だいじょうぶ！　だいじょうぶ！」
お兄ちゃんが自分に言い聞かせるように言いました。
「きっとそうだよね」と、僕とお姉ちゃんは祈るような気持ちで言いました。
翌日、朝六時三十分、
「みんな、起きなさーい。お母さんは出かけるからね。ちゃんと準備

して、遅刻しないように学校に行くのよ。じゃあ、行ってきまぁーす」と大きな声で言いながら、お母さんは元気よく家を出て行きました。

僕ら三人は飛び起きて、キッチンへ行くとお父さんが一人でコーヒーを飲んでいました。

「おはよう。コーヒーは入れてあるけど、トーストは自分で焼きなさい。お父さんはもう会社に行くから、戸締りを忘れないように」

「お父さん、お母さんどうしちゃったの？　本当に家事をしないの」

「お母さんが決めたことだ。今まで家事や家族のことばかりで、自分のことは何もできなかったって言われてさ。お父さん、何も言えなか

ったよ。お父さんもお母さんに甘えていたんだと思ってな。お母さんの希望を聞いてあげようと思ったんだ」とお父さんはしんみり言いました。

お母さんの「家事放棄宣言」は本当だったんだと思い、三人はもう何も言いませんでした。黙って、姉ちゃんはバナナと牛乳、僕はシリアルに牛乳、お兄ちゃんはカロリーメイトで朝食をすませて、学校へ行きました。

その日、お姉ちゃんはいつも学校の帰りに友達と行くマックへも寄らずに早く帰ってきました。

「しょうがないなぁ。カレーでも作るか」と言って、冷蔵庫にあった

ジャガイモや人参を使って、慣れない手つきでカレーを作りました。
僕はお母さんがプレステより簡単と言っていた洗濯機の使い方をお姉ちゃんに教えてもらって洗濯をしました。
お姉ちゃんが「悟もサルより賢いことが証明されたね」と言って笑いました。
お兄ちゃんもバイトが終わるとすぐに帰って来ました。
七時頃にお母さんから電話があって
「今日はおばあちゃんの家に泊まるから心配しないでね。明日は土曜日だから学校はお休みでしょう。家のことお願いね」
「お母さんいつ帰って来るの？　僕、家のお手伝いもするから必ず

帰って来てね」と僕が言うと

「あたりまえじゃない。明日の夕方には帰るから、部屋の掃除をして、宿題もすませておくのよ」と一方的に指令を出して電話を切りました。

お父さんは仕事で遅くなると電話があったので、三人でお姉ちゃんが作ったカレーを食べました。お母さんのカレーとは一味違いましたが、案外美味しくできていました。

「とりあえず、お母さんの気が済むまで好きなことをさせてあげよう。悟も加奈も自分のことは自分ですること。家のことはそれぞれができることを分担してやっていこう」とお兄ちゃんが言いました。

僕は本当にだいじょうぶかなぁと思いながらカレーをおかわりしました。

次の週になってもお母さんは朝から、デパートへ買い物に出掛けたり、友達に会ったり、図書館に行ったりと本当に家事をしませんでした。お母さんは毎日楽しそうでした。

僕たち兄弟三人も掃除、洗濯、料理と家のことがなんとかできるようになってきました。

僕も卵焼きくらいは作れるようになりました。

お母さんの家事放棄宣言から二週間、兄弟三人の家事当番も軌道

に乗り始めたころ、またまたお母さんがみんなに話があると言い出しました。

「おいおい、今度は何宣言だよ」と思っているとお母さんは言いました。

「三人ともこの二週間よく頑張ったわね。ありがとう。まあ七十点くらいだけど、合格点よ。これならお母さんがしばらく留守にしてもだいじょうぶね」

「留守にするって、どういうこと？」

「お母さんね。おっぱいに腫瘍が見つかって手術しないといけないの。だから来週入院することになったのよ。退院してもしばらくは

今までみたいに動けないでしょう。だから三人に自分のことは自分でできるようになってほしかったの」と言いました。

「お母さん、手術したら治るんでしょう」僕は心配になって聞きました。

「治るわよ。悪いところを取ったらだいじょうぶ。また元気になって今までのように家事もできるようになるから」

「いいよ。退院してもお母さんは好きなことをしなよ」とお兄ちゃんが言うと

「そうよ。私も料理のレパートリーが増えたから料理するのが楽しくて」お姉ちゃんが言いました。

「僕はお母さんが家にいてくれるだけでいいよ」と言いました。

するとお母さんは

「お母さんは本当は家事が大好きなの。家族のためになんでもしてあげることがお母さんの幸せよ。元気なったら『家事頑張るぞ！宣言』をするから、待っていてね」と言って右手を高く上げました。

（具志堅　都）

スコール

「安良城みなみ」

「はい」

「泉川レン」

「はい」

西原先生がつぎつぎと名前を呼び、答案が返されていく。五年生になって最初におこなわれた算数のテストだった。みずきはめずらしく、どきどきしていた。テストの前の日、お兄ちゃんに教わって自信があったのだ。

テストのあった日、みずきは学校から帰るとただいまも言わないで「出た、出た、お兄ちゃんが教えてくれたのぜんぶ。それでスラスラできたんだよ」と叫んだ。そして問題を思い出しながらやりなおしてみた。ちょっとしたミスがあったとしても九十点は確実だと思った。第一、五年生になる今まで学校でやったテストの問題を家に帰ってからも覚えていることじたいなかったんだから。

（もしかしたら初めての百点かも…）

みずきは、自分でもはずかしくなるくらい胸をときめかせて、きょうの日を待ちわびた。

西原先生は五十音順に男子と女子を交互に呼ぶ。四年生の時の

担任の先生は点数の良い順に男子が先だったから、みずきはたいてい最後のほうに呼ばれた。きょうのように自信のある時だったら、真っ先に呼ばれて最高にイイ気分だろうけど、四年生では一度もその気分が味わえなかった。きょうくらい西原先生も点数の良い順に呼んでくれたらどんなに良かっただろう。そんなことを思いながら、胸の高鳴りは頂点に達していた。

いよいよ順番が近づいてくる。

「真栄田さやか」

「はい」

「真栄田みずき」

「ハイッ！」

みずきははじけるように席を立ち、小走りで答案を目指した。やっとの思いで手にするとはやるきもちはおさえきれなくなって席にもどる途中、点数のところだけそっと見た。

ところが…七十点しかついていなかった。

（ええっ？）

席に着いてからこんどはざっと答案の全体を見た。大きな×が三つもついている。

（なあーんだ。はあ～あ）

みずきはらんぼうに答案をふせた。

後ろのほうから会話が聞こえてくる。
「九十五点か…やっぱりな。さすがさやか」
「レンくんこそ…また百点なんでしょ？」
「ぜんぜんダメだった。最悪…八十点」
「へえ…ウソ…ホント？」
算数の得意なレンくんにもこんどはそれだけむつかしかったのだ。
わたしがもし百点をとっていたらクラスのみんなはどんなにびっくりしただろう。みずきはそう思ってなんどもなんども、ふかいためいきをついた。
さやかはみずきとおなじ『真栄田』というみょう字でしんせきでは

ないけれど、お家が近くてようちえんのころからいつもいっしょに登下校している。でこぼこコンビだけれど。

さやかに話しかけるみなみの声がした。

「いちどでいいからさやかをやっつけてみたいと思っているんだけど、わたしのこのポンカスアタマじゃ、一生かかってもムリね」

「そんなことないよ。みなみだってできるじゃない。こんどはよかったんでしょ？」

「五十点。ほら。四年生は四十点で終わったから、ちょっとはよくなったんだけどね」

みずきは、勉強がよくできて背もたかいさやかがうらやましかっ

た。みなみのことはもっとうらやましかった。これだけはっきりどうどうと自分の思っていることを声を大にできたらどんなにさばさばすることだろう。

みずきは口にこそしないけれど、いつかはさやかをやっつけてみたいと、ずっとずっと思っていた。みなみよりもっと思っていた。

それがきょう叶うはずだった。

「みんなしずかに！答案の見返しをするぞ。一問目は先生の思いやり問題だぞ。いいか…」

先生はぐるりと教室じゅうを見わたした。

「できてない人は四年生からやりなおしだ。そうそう、川田！おま

えいつから名前ナシタローになったんだ？このアホンダラめが…」

みんなは直太郎を見て、どっと笑った。

みずきはちっとも笑う気になれなかった。

答案を見返す元気も出てこない。

（お兄ちゃん…どうしてこうなったの？）

お兄ちゃんは今、家の近所の病院でシュギョウをしていて、夜は高校に通っている。『ミュージシャンになるぞ』と宣言していたお兄ちゃんが突然『介護福祉士を目指すことにする』とこころを変えたのはみずきが三年の時。高校中途に、お兄ちゃんの大好きだったおじいちゃんが亡くなったからだった。

お兄ちゃんの解き方がジダイおくれになったとは思えない。浮かれすぎたのかなぁ。

何だったんだろう。みずきはしぶしぶ答案を表にしてぼんやり、名前のらんを見た。

（あれっ？）『真栄田さやか』になっている。

（ええっ？）心臓がドキンと鳴った。

書き方のお手本のような『真栄田』の文字は『勉強のできる子』らしくとってもきれい。けれど、解答らんをよく見ると、計算あとの消し残しがあったり、式や答えは書きなおしでよごれていたり、さやからしくなかった。

（そっか。これはさやかの答案だったんだ。そしたら…さやかのもっているあの答案が…あの九十五点がわたしの…そうだったんだ）

胸の奥のほうからなんともいえないうれしいきもちがふつふつとわいてきた。

九十五点の自分の答案を早く見たい。早くこの手にして、早く確かめたい。先生の特徴ある数字が大きくおどっていることだろう。

いても立ってもいられなくなって、おそるおそる、さやかのほうをふりむいてみた。

さやかはつくえの上に片ヒジを立ててうつむいていた。顔がすこし赤くなっている。

（さやかも気づいたんだ…）

どうしよう。どうしたらいいんだろう。

うれしいきもちは苦しみに変わった。

先生はなにも気づいてないふうにどんどん進めていく。先生の記録も間違ったままなのかな。さやか九十五点、みずき七十点、と。それがいつものフツウのことだから、先生も気づかないんだろう。先生に申し出たほうがいいのかもしれない。そしたらさやかがイヤな思いをするんじゃないかな。さやかのほうから言ってくるのを待つほうがいいのかな。

思案にくれているうちチャイムが鳴った。

時間中にはとうとう指名もされずほめられもしなかった。もしかしたら…と少しは期待していたのに。『特別に成績が上がると見返しの途中だって名前発表するよ』そんな西原先生どくじの展開パターンを聞いていたから。

しまうにしまえないさやかの答案を手に、おろおろしていると「図書室？いいよ！」の声がした。ふりむいて見るとさやかとみなみが肩を並べて教室を出て行くところだった。

答案を取り違えているというのにさやかはどうしてそう平気でいられるんだろう。どうしてすぐに取り替えようとしないんだろう。

先生もさっさと引きあげて行った。

さやかがまさか知らんぷりってことはないだろうけれど。でも、帰り支度をしていてもさやかはなにも言ってこなかった。

「ごめん…みずき」

うわばきをはき替えている時だった。さやかの声に心臓がドキンと鳴った。けれど、さやかは「待った？」と言っただけだった。

帰り道で言うつもりかもしれない。

通りに出ていくら歩いても「あの信号いつまで押しボタンのままなんだろうね」とか、「あの犬、きのうもあそこにいたよね」とか、さやかは答案とはぜんぜん関係のないはなしばっかりした。そのうち、

あたりがどんよりしてきて、さやかはなんにも話さなくなった。
みずきは今朝、お母さんに「きょうはカサ持ったほうがいいわよ」と言われたのにムシして飛び出してきたことを思い返しながら、
『もうすぐ家だし…もつよね、ねっ！』
さやかと分け合いたいそのことばを、ツバといっしょにゴクリとのみこんだ。
「あ、あれ、みずきのお兄ちゃんじゃない」
重いこころをひきずっているうち病院の真ん前に来ていた。若草色のユニフォームを着たお兄ちゃんが表で杖をついたおばあちゃんとお話している。たぶん、退院なんだろう。お兄ちゃんがいちばん

うれしいという瞬間だ。ふたりに気づいたお兄ちゃんは、
「おーみずき、おかえり！さーやも…いつもありがとな」と手をあげてにっこりした。
「で、どうだった？待望の百点は？ん？」
「・・・」
「それじゃ、くれぐれもお大事に！」
お兄ちゃんはさっきのおばあちゃんの家族らしい数人の乗り合わせた車が走り去っていくのをしっかり見届けてから、だんまりしているみずきにあらたな笑顔をむけた。
とその時、雨がいきおいよく降ってきて、みずきがはっと気づいた

時にはさやかのすがたはもうどこにも見当たらなかった。
さやかはすでに家の方に歩いていた。
びしょぬれになったさやかの背中がとっても小さく感じられたみずきは初めて、ウソのさやかを、別のさやかを見た思いだった。
答案のことに触れなかったさやかのほうが苦しい思いをしていたのかもしれない。さよならも言えないくらいに。ふと、そんな気がしたみずきはスコールの中ひとりトボトボと帰っていくさやかをただ見つめているしかなかった。「さやか！」と大きな声で呼びたいのをこらえて、突っ立っているしかなかった。「待って」も「またあしたね」も言えなくて、つぶれそうになる自分のこころをどうはげましていい

かわからなかった。

（しもぢ　せつこ）